特集 地域共生社会の実現を目指して

地域や家庭の支え合う力が弱体化する中、安心した暮らしを送るためには何が必要でしょうか。「自らの役割がある」「互いに認め合い、支え合う」「その人らしい生活が送れる」。そんな地域共生社会の実現が求められています。

地域共生とは…

隣近所には誰がいて、どこに勤めていて、どこの学校に行っていて…。昭和のころまでは、自然と顔の見える関係があり、地域や家族同士で助け合って暮らしていました。今は隣近所の関係性も薄れ、さらに少子高齢化により、地域や家庭の支え合う力が弱まっていると言われています。

しかし、人は決して一人では生きられず、互いに助け合いながら人生を歩んでいきます。その道中では、病気を患ってしまったり、失業して生活に困ったり、また、被災してしまうこともあるかもしれません。そのような困難に直面しても、孤立せずにその人らしく生活できる「地域共生社会」が望まれています。

「地域共生社会」とは、地域の人や団体・企業が世代や分野を越えてつながることで、一人一人の暮らしと生きがいが尊重され、そして地域をみんなで一緒につくる社会のこと。そのような社会を目指すため、市内でもいろいろな取り組みが始まっています。「地域の絆を強くしたい」「お互いの理解を深めたい」。今回の特集では、そんな地域共生の取り組みを紹介していきます。

参加者のつながりが地域のキズナ

地域の高齢者福祉の総合窓口を担っているケアタウン安暮里(あぐり)。福祉関係者と地域住民が話し合う「だいじだねット会議」を開催しています。ケアタウン安暮里のセンター長・池澤守さんに現状と課題を聞きました。

ケアタウン安暮里
(地域包括支援センターあぐり)
池澤 守 センター長

キーワードは「だ・い・じ」

地域住民や社会福祉協議会、ケアマネージャーなどの福祉の専門職が月に一回とようら公民館に集まる。会議では、地域で実際に起こった事例を共有したり、対策を協議したり…。参加者はもともと高齢者支援の専門職だけだったが、今年から住民も加わり、会議の名前も「だいじだねット会議」に改めた。「地域の人に参加してもらい、いろいろなことを知ってもらいたい」。できるだけ専門用語を使わず、分かりやすくするように心がけているという。

とちぎの方言としてもよく使われる「だいじ」。意味は「重要」ではなく「大丈夫」。まさしくこれが、この会議の名前の由来だ。「誰もが」「一緒に」「自分たちのことだと思って考えれば」「大丈夫だ」。会議の前に必ず「だいじだ」に込めた思いを紹介するのが習わしである。

池澤さんは「地域の人と話をすると、『よくよく(ひどい状態)になったら池澤さんに連絡するよ』と言われるのですが、よくよくになってからではダメなんですよね。だから、ちょっとでも気になることがあったら相談するよう呼びかけています」と話す。

つながる地域を目指して

「参加者がつながり、地域の助け合いの輪が広がれば良い」と語る池澤さんだが、その背景にあるのは、近年増えている孤独死の問題。一人で最期を迎え、発見までに2週間以上も経過してしまったという事例も。「地域、デイサービス、ボランティアなどが関わることで、少しでも悲しい死を防げるかもしれない」と語り、「日ごろから気にかける関係ができること。それが万が一の時にとても役に立つんです」と教えてくれた。地域がつながり、声を掛け合うことで、結果的に災害にも強い地域になるという。

「今はいかに高齢者を福祉に結び付けるかで精一杯」と話す池澤さん。一方で、地域では高齢者に限らず、生活困窮者や障害者、子育て世代など多様な人が助けを求めている。「これからは、高齢者だけでなく、それらの人も含めた支援が必要」と話し、「いずれはその役割を地域の中で果たしていかなければならないと感じている」と今後の使命を述べた。